

談話における Wh 分裂文の機能

加藤 雅 啓*
(平成9年4月30日受理)

要 旨

本稿は、談話における wh 分裂文の機能について、Declerck (1984, 1988) で提案された談話の話題 (discourse topic) に基づく「話題継続の原則」の不備を指摘し、代案として関連性理論の観点から、wh 分裂文に関する談話上の制約を提案するものである。¹この際、wh 分裂文の wh 節の内容は先行文脈と最適な関連性を持つ必要があることを結束性 (cohesion)、意味論、語用論の立場から明らかにした。さらに、この制約は Declerck (1984) の「話題継続の原則」では説明できない例をも的確にとらえることができることを示し、談話における wh 分裂文の適格性の微妙な相違にも対応することができる妥当性の高い制約であることを例証した。

KEY WORDS

discourse topic
Relevance Theory

談話トピック
関連性理論

Optimal Relevance
wh-cleft

最適の関連性
wh 分裂文

1. Declerck (1984, 1988) の「話題継続の原則」

Declerck (1984) は、it 分裂文と wh 分裂文を談話における機能という観点から分類し、それぞれ contrastive clefts, unstressed-anaphoric-focus clefts, および discontinuous clefts の三種類の分裂文に下位分類されると主張している。それぞれの下位分類の特徴をまとめたものが、表 1 である。さらに Declerck (1984) は、基本的には it 分裂文と wh 分裂文の間には機能的な相違はないが、文脈によって一方が他方より好まれる場合がある、と次のように述べている。

... There is therefore no basis left for claiming that the two constructions have a different meaning or function.

Still, it is clear that WH-clefts and it-clefts are not always interchangeable and that there may be contexts in which one of the constructions seems preferable to the other.
(Declerck, 1984: 269)

文脈に応じて、it 分裂文と wh 分裂文のいずれかを選択する際、その選択基準として Declerck は次のような「話題継続の原則」(Principle of Theme Continuity) を提案している。²

* 言語系教育講座

- (1) Principle of Theme Continuity: The choice of a particular type of cleft often appears to be determined by the tendency to process a continuous topic as first element of the sentence (i.e. as focus of an *it*-cleft or as the subject clause of an (inverted or noninverted) *WH*-cleft). (Declerck, 1984: 274)

この原理は分裂文を選択する際、先行文脈の話題が文の最初の要素になるように *it* 分裂文、あるいは *wh* 分裂文を選ぶ、ということの規定したものである。

- (2) a. Have you found everything you need?---Well, I've found the handbooks that I need, but what I haven't found is the dictionary.
 b. Have you found everything you need?---Well, I've found the handbooks that I need, but the dictionary is what I haven't found. (Declerck, 1984: 275)

(2a) では、*wh* 分裂文の *wh* 節が先行文脈のトピックを継続しているから「話題継続の原則」を満足している。一方、(2b) では、*the dictionary* が分裂文の文頭の要素に選ばれているが、これは先行文脈の話題ではない。したがって、(2b) はこの原理を破るため容認性が低くなっている、と Declerck は説明している。

表 1

Contrastive clefts	Unstressed-anaphoric-focus clefts	Discontinuous clefts
Focus: new; Wh/ <i>that</i> -clause: old	Focus: old; Wh/ <i>that</i> -clause: new but represented as old	Focus: new; Wh/ <i>that</i> -clause: new
Focus: heavily stressed; Wh/ <i>that</i> -clause: weakly stressed	Focus: weakly stressed; Wh/ <i>that</i> -clause: normally stressed	Focus: normally stressed; Wh/ <i>that</i> -clause: normally stressed
Focus: strongly contrastive	Focus: not strongly contrastive	Focus: not strongly contrastive
Focus: likely to be a persistent topic	Focus: not likely to be a persistent topic, but Wh/ <i>that</i> -clause is	Either focus or Wh/ <i>that</i> -clause can be a persistent topic
Cannot be used as a discourse opener	Cannot be used as a discourse opener	Can be used as a discourse opener
Wh-clefts can be inverted or noninverted	Wh-clefts: always inverted	Wh-clefts can be inverted or noninverted

(Declerck, 1984: 268)

2. 「話題継続の原則」の問題点

Declerck (1984) の「話題継続の原則」は、以下に述べるような論理的、理論的、経験的な問題点を含み、談話における wh 分裂文の機能を一般化した原則とは思われない。

2. 1 論理的不備

「話題継続の原則」の規定の仕方では「談話トピックならば分裂文の文頭の要素になる」となり、談話トピックであることは分裂文選択の十分条件である、と規定していることになるが、これは論理的には正しくない。なぜなら、ある要素が談話トピックであっても、必ずしもその要素は分裂文の文頭に現れることはないからである。従って、「話題継続の原則」は、その内容は措くとして、論理的には「分裂文の文頭の要素は、先行文脈で談話トピックである必要がある。」と規定すべきである。

2. 2 理論的矛盾

「話題継続の原則」は Declerck 自らが提案する wh 分裂文の下位分類である Discontinuous cleft, すなわち、wh 節も焦点節も新情報を担い、談話を始める文として談話冒頭に用いることができる分裂文にも適用できると述べている (Declerck 1984: 276) (表 1 を参照)。しかし、この規定には理論上、問題となる点がいくつかある。まず、Discontinuous cleft は、定義上、その wh 節は焦点節同様、新情報を担うため、談話の冒頭で用いることが容易である、と述べられている (Declerck, 1984: 267)。ところが談話の冒頭というのは、通例、談話トピックは未定である。したがって、「話題継続の原則」に従えば、Discontinuous cleft は談話冒頭では用いることができないことになるはずである。また、Discontinuous cleft の wh 節は、その定義上、新情報を担うのであるから、通例、旧情報である先行文脈の談話トピックを引き継ぐことはできないはずである。このように「話題継続の原則」は Discontinuous cleft の定義とは相容れないものであり、結果として理論的な矛盾に陥ることになる。

2. 3 経験的不備

「話題継続の原則」を実際の談話に適用しても、そこで用いられている wh 分裂文の適格性を説明できない例が存在する。

(3) A: I hear you've got a job at Johnson's. A nice place that is. I suppose you're happy now?

B: Well I don't know. *What I'd really like to do* is run a business of my own. But I can't do that because I've no money of my own. (Declerck, 1988: 216)

(3A) の談話のトピックは「ジョンソンの店で仕事に就いたこと」である。しかし、(3B) の wh 節は、この先行文脈の談話トピックを継続しているわけではない。したがって、「話題継続の原則」に従えば、(3B) の wh 分裂文は不適格文と判定されるはずであるが、実際には適格な発話と判断される。

これまで第2節で検証してきたように、「話題継続の原則」には論理的不備や理論的矛盾があり、また(3)でみたように、wh分裂文の適格性を正しく捉えることができないという経験的不備が存在する。したがって、「話題継続の原則」は談話におけるwh分裂文の機能を正しく捉えることができず、理論的な一般化を達成している原則とは言いがたいと結論することができる。但し、この結論はwh分裂文の適格性判断に先行文脈における談話トピックが全く関与しないということの意味するものではない。談話におけるwh分裂文の意味と機能は先行文脈の話題と密接に関係していることは明らかである。しかし、これがwh分裂文の適格性を決定する要因のすべてではない。次節では、wh分裂文がどのような構造を持ち、とくにwh節が先行文脈とどのような関わり方をしているのか、明らかにしていくことにする。

3. Wh 分裂文の構造

一般に、wh分裂文はwh節と述部の2つの要素からなり、意味論的にはwh節は前提を、述部は焦点を表す、と考えられている。Grimes (1975: 338) はwh分裂文が果たす機能の観点から「wh分裂文は2つの部分から構成され、疑問文に対する応答文と同様に、疑問部分と応答部分から成り立つ」と述べている。また、Kuno (1977: 98) は、文中においてbe動詞の縮約が可能であるか否かということに基づいて、wh分裂文ではbe動詞の前に必ず休止が存在することを検証した。³すなわち、音調的にもwh分裂文は2つの情報単位から構成されていることが確かめられる。

このように、wh分裂文は意味的、機能的、さらに音調的にもwh節と焦点節の2つの構造から成り立っていると考えるのが一般的である。このうち次節では談話におけるwh節の機能について考えてみることにする。

4. Wh 節の機能

Prince (1978: 889-893) は、wh分裂文の先行詞 (antecedents to wh-clefts) となる情報単位として、explicit information, implicit information, contrast, metalinguistic antecedents, *think* type, *happen* type を挙げている。Prince の議論で前提とされているのは、談話におけるwh分裂文のwh節は、一般に言語的・非言語的の先行文脈に現れている情報と、直接的、あるいは間接的に一定のつながりを持つ、ということであると思われる。本稿では、これを(i)形式的つながり、(ii)意味論的つながり、(iii)語用論的つながりに分けて分析していくことにする。

4. 1 形式的つながり

4. 1. 1 照応表現

Halliday and Hasan (1976: 11) で論じられているように、ある要素の解釈が他の要素に依存している場合、そこには結束性(cohesion)という意味的關係が生じ、これによって談話が一つのまとまりのあるものになるのである。wh節には次例のように照応表現を含む例が数多くみられる。照応表現は、通例、先行文脈に言及することによってその意味解釈が完結する。こ

の意味で wh 分裂文の照応表現を含む wh 節は先行文脈と密接な関係を持ち、談話の結束性に貢献しているといえる。

- (4) a. *Those apples* are good, aren't they?---So they are! What keeps me from eating all of *them* is that mother would be furious if I left none for the others.
(Declerck, 1984: 264)
- b. MacWorld Tokyo 1997, in fact, looked more like an auto show thanks to an eye-catching Olympus display luring in unsuspecting *men* with the promise of bikinis.
What *they* found, however, was technology and, innovation geared at the Mac.
(*The Daily Yomiuri*, 2/25/97, by Edward A. Mazza II)

4. 1. 2 反復

先行文脈に現れている語句と同じ語句を wh 節の中で繰り返すことによって、先行文脈とのつながりを維持することができる。具体例をみてみよう。

- (5) a. ...*miners* are making it clear that they have not the heart for much more fighting...what *miners* want now is cash in hand and a secure future.
(Sornicola, 1988:363)
- b. She was a pretty girl, small and thin...She had, in fact, all the distinguishing marks of one who *is thinking of* her sailor lover.
But she was not. She had no sailor lover. *What she was thinking of* was that at about this time they would be lighting up the shop windows in London, and that of all the deadly, depressing spots she had ever visited this village of Millbourne was the deadliest.
(Sornicola, 1988: 365)

(5a) では *miners* を繰り返すことによって、(5b) では *thinking of* を反復することによって、先行文脈とのつながりを維持している。

4. 2 意味論的つながり

4. 2. 1 前提

wh 分裂文の wh 節は、通例、前提を表し、先行文脈の内容と意味的なつながりを持つ。

- (6) I'm really very sorry to disturb you. It's just that we're making a few inquiries about Margery Phipps. *What I'd like to know* is exactly what you did after shooting finished on the day Margery Phipps died.
(Carlson, 1983: 227)

(6) の wh 節 *What I'd like to know* の前提は [I'd like to know x] である。この前提は先行文脈の *a few inquiries about Margery Phipps* と意味的なつながりを持っていることは明らかである。

4. 2. 2 定性 (definiteness)

Grimes (1975: 340) は、「wh 分裂文の Wh 節は定 (definite) である」と指摘している。ある要素が定であるというのは、それが聞き手にとってそれと分かるものであると話し手が考えているものである。「聞き手にとってそれと分かる」というのは、聞き手を取り巻く場面や文脈から、その表現によって指示されているものが唯一的に同定できるということである。これを wh 分裂文にあてはめてみると次のように言うことができる。Grimes に従えば、wh 節は定であることから、その指示対象の同定には場面や文脈を参照することになる。この結果、wh 節は場面や文脈と意味的なつながりを持つことになるのである。

4. 3 語用論的つながり

4. 3. 1 対比

4. 0 でも触れることがあったが、Prince (1978: 890) は wh 分裂文の先行詞となる情報単位として対比 (contrast) を挙げている。また、Sornicola (1988: 364) も wh 分裂文の談話における機能として対比を取り上げて論じている。このように wh 分裂文は先行文脈で述べられている事柄に対して対比的な要素を wh 節内に置くことにより、先行文脈とつながりを維持しているのである。これを具体例で確認してみよう。

- (7) a. Our position is a *dynamic* one. It will be more and more refined as conditions change in the course of the struggle. *What is constant* is our commitment to a revolutionary emancipation of Ethiopia. (Prince, 1978: 890)
- b. ...*It hardly matters* that Mr. Reagan wants the plan, as critics say, for the wrong reason... *What does matter* is that the plan will get the presidential push it needs to have any chance of survival. (Sornicola, 1988: 364)

(7a) の wh 節は、先行文脈にある *dynamic* と対比的な意味を持つ *constant* を用いることによって先行文脈とつながりを持つ。(7b) でも同様に、*hardly matters* と *does matter* を対比させることによって先行文脈とのつながりを維持しているのである。

4. 3. 2 橋渡し推論 (bridging inference)

wh 分裂文の wh 節内の表現が、(4) の照応表現の例や (5) の反復の例のように、直接的に先行文脈の内容に言及するのではなく、次の例のように橋渡し推論によって先行文脈の内容に間接的に言及することによってつながりを維持する場合がある。

- (8) a. Himself a religious Jew, Prof. Flusser says that Carter's piety is not the problem. "*What I'm worried about*", he declares, "is that the influence of Carter's advisers may eclipse the influence of the Divine Spirit."
- b. Nikki Caine, 19, doesn't want to be a movie star. *What she hopes to do* is be a star on the horse-show circuit. (Prince, 1978: 887)

(8a) の最初の文は、カーターの敬けんさは問題ではないことを直接的に伝え、同時に、フラッ

サール教授は何か問題が存在すると思っているということを間接的に伝える。聞き手は「何か問題があれば、人はそれを心配する」という語用論的知識をもとに、橋渡し推論によって wh 節を先行文脈と関係づけて解釈しようとするのである。(8b) では、最初の文からニッキ・ケインは映画スターになりたくないと言っているのであって、彼女が何かをしたがっているかどうかということはわからない。しかし、19歳の娘が何かになりたいと思っていることは、聞き手の語用論的知識から橋渡し推論によって推測することができる。聞き手はこのような推論に従って wh 節を先行文脈と関係づけて解釈するのである。

4. 3. 3 関連性

聞き手は、発話を解釈する際、一般に、話者が何らかの関連性のあることを伝達しているという見込みに基づいて発話を解釈しようとする。このことは wh 分裂文を解釈する場合にもあてはまる。例えば、wh 節を解釈する際、その手がかりが先行文脈から直接得られない場合には、「話者は何らかの関連性のあることを伝達しているはずである」という見込みに基づいて先行文脈や発話の場面に間接的な手がかりを求める。このような方法によって wh 節は先行文脈とのつながりを維持することができるのである。

(9) a. Hell, no. I wouldn't pay that much attention to it. I agree, I agree. *What I meant* is just do the best to control it. (Prince, 1978: 891)

b. Precisely how pseudo-clefts are formed need not concern us. *What is relevant* is their dialogue function. (Carlson, 1983: 227)

Prince (1978: 890) は、(9a) について、人が何かを発話すれば、それを聞いている人は、その人が何かを意味しようとしているのだと協調的に考える、と述べている。また、Carlson (1983: 227) は、話し手は自分の述べていることが聞き手にとって関心があると思って発話しているのであるから、(9b) のような wh 分裂文は談話のどこにでも生じうると指摘している。

以上、4 節で観察したことから、wh 分裂文の wh 節で述べられている内容は形式的、意味論的、語用論的つながりを持ち、言語的・非言語的の先行文脈から直接・間接的に導かれる情報と密接に関係していることが明らかになった。

5. Wh 分裂文と関連性理論

これまで論じてきたことから、談話における wh 分裂文は、概略、次のような談話の制約を満たさねばならないと思われる。

(10) wh 分裂文の wh 節で表されている内容は、言語的・非言語的の先行文脈から直接・間接的に導かれる情報に関して関連性を持っていなければならない。

この制約に関して明らかにしておかなければならないのは、談話において wh 節が先行文脈に関して関連性を持つ場合、それをどのようにして査定するかということである。これに関して

は、前節で見たように、wh 分裂文は橋渡し推論や協調の原理のような語用論的要因が強く関与していることが明らかである。また橋渡し推論に関しては、関連性理論の立場から論じた論考があることから (c.f. Matsui (1993), Kato (1996a, b)), 本稿では(10)の談話の制約を関連性理論の枠組みによって一般化することを試みる。

5. 1 関連性理論

Sperber & Wilson (1986) は、発話是最適の関連性(11)を満たすこと、また意図明示的なコミュニケーションは関連性の原理(12)に従わねばならないと述べている。

- (11) Optimal Relevance (OR): An utterance is optimally relevant if and only if it achieves an adequate range of contextual effects for the minimum justifiable processing effort.
- (12) Principle of Relevance (PR): Every act of ostensive communication communicates the presumption of its own optimal relevance. (Sperber and Wilson 1986: 158)

最適の関連性(11)は、ある発話が十分な文脈効果をもたらし、その発話を解釈するのに最小限の処理労力ですむ場合、そしてその場合に限って、その発話是最適な関連性を達成している、ということの規定したものである。また、関連性の原理(12)は、すべての意図明示的の伝達行為はその行為自体の最適な関連性を見込みを伝達する、ということの規定したものである。これは、概略、ある発話を解釈する際、その発話が最適の関連性を満たしている、すなわち、何か意味のあることを言っているはずだ、という見込みを抱いて解釈する、ということ述べたものである。

5. 2 Wh 分裂文の関連性制約

上記の関連性理論の枠組みに従うと、前述した談話の制約(10)は次のように一般化できる。

- (13) Wh 分裂文の関連性制約: wh 分裂文は、その wh 節と焦点節のそれぞれの情報が「最適の関連性」を満たさない場合には、首尾一貫した談話に生じることはできない。すなわち、wh 分裂文は次の場合に不適格となる。(i) wh 節の情報が、先行文脈に言及、もしくは橋渡し推論する際の処理労力を相殺するほど十分な文脈効果をもたらすことができず、かつ、(ii) 焦点節の情報が、wh 節の内容を指定する際の処理労力を相殺するほど十分な文脈効果をもたらすことができない場合。⁴

wh 分裂文の関連性制約(13)は、wh 節の内容が先行文脈に関して最適の関連性を持ち、かつ焦点節が wh 節に関して最適の関連性を持つ場合に限って、その wh 分裂文は適格とされるという規定したものである。関連性制約(13)がどのように適用されるか次の例でみてみよう。

- (14) A: What time did you leave the building?
B: ??? *What I did at five thirty* was leave the building. (McCarthy, 1991: 53)
- (15) A_i asks B_j the time_i that B_j left the building_k.

- (16) a. A_i wants to know the time_t that B_j left the building_k.
 b. In this situation, B_j is usually expected to answer the question by designating the time.

(14A) の発話を聞いた聞き手は (15) の命題を導き、この命題から (16a-b) の一連の想定を導くと思われる。聞き手はこれらの想定から (14B) の wh 節の関連性を査定するが、(14A) の発話は命題 (15) から明らかのように、「5時半に何をしたか」を尋ねているのではなく、「その建物から去った時間」を聞いているのであるから、wh 節は (16a-b) のコンテキストにおいて何の文脈効果をもたらさない。したがって、(14B) の wh 節は制約 (13 i) に違反することになる。しかし、聞き手はこの時点で直ちに (14B) の解釈を放棄ことはない。なぜなら、聞き手は関連性の原理(12)に従い、関連性の見込みを抱いて (14B) の焦点節 *leave the building* を解釈しようとする。すなわち、焦点節で述べられている内容が wh 節に対して何らかの関連性を持っているであろうという見込みを持って、焦点節の最適の関連性を査定しようとするからである。ところが、焦点節 *leave the building* は、すでに先行文脈 (14A) で述べられており、(14B) の焦点節も何の文脈効果ももたらさず、制約 (13 ii) に違反する。この結果、(14B) の wh 分裂文は、関連性制約 (13 i) 及び (13 ii) に違反することになり、(14) の談話における適格性は極めて低くなるのである。

次の例は、完全な適格文ではないが、(14B) と比較するとその適格性は幾分よくなっている例である。

- (17) A: Hello, operator. I'm trying to dial this number. Could you please check it for me?
 B: ?What I think is the exchange is overloaded. Hold on while I check it.
 (Carlson 1983: 228)

聞き手は、(17) の最後の発話から (18) の命題を導き、さらにこの命題から (19a), (19b) のような想定を導くと思われる。

- (18) The customer_i asks the operator_j to check the telephone connection_k.
 (19) a. If the operator is attending to the job, then he/she is usually supposed to deal with the customer's request concerning the telephone service.
 b. If something is wrong with the telephone connection, then he/she is supposed to check it.

このような想定を抱いて、聞き手は (17B) の wh 節 *What I think* を解釈する。ところが、(17A) では、A が依頼しているのは電話回線のチェックであって、オペレータ B の意見を尋ねているわけではない。したがって、この wh 節は (19a, b) の文脈では何の文脈効果ももたらさず、関連性制約 (13 i) に違反することになる。しかし、聞き手は、関連性の原理 (12) に従い、注目に値する情報が述べられているであろうという見込みを持って、(17B) の焦点節を解釈しようとする。この焦点節で述べられている新情報 *the exchange is overloaded* は、(19a, b) の

文脈で、オペレータは電話回線をチェックすることになっている、という文脈効果(文脈含意)をもたらす。また、処理労力に関していえば、電話交換局がオーバーロードになれば、電話回線の接続に不都合が生じるという背景知識から、(17B)の焦点節は容易に解釈することができる。したがって、(17B)の焦点節は関連性制約(13 ii)を満足する。

ここで、(14B)と(17B)の適格性の相違に注目してみると、(17B)のほうが適格性が高いことがわかる。関連性制約(13)はこの事実を的確にとらえることができる。すなわち、両者の適格性の相違は、(14B)のwh分裂文は関連性制約(13 i)と関連性制約(13 ii)の2つの制約に違反しているのに対し、(17B)のwh分裂文は関連性制約(13 i)には違反しているが、もう一方の関連性制約(13 ii)を満たしている、という相違に還元することができる。Declerck (1984)で提案されている「話題継続の原則」(1)は、このようなwh分裂文に関する適格性の微妙な相違を理論的にとらえることは不可能である。

最後に、Declerck (1984)の「話題継続の原則」では説明できない例をみてみよう。

(20) (デパートのおもちゃ売場での男の発話)

What I'm looking for is a present suitable for a 6-year-old.

(Collins, 1991: 100-101)

(20)のwh分裂文は、Declerck (1984)の規定する discontinuous cleft が談話冒頭で用いられた例である。しかし、第2節(ii)で述べたように、談話冒頭では、通例、談話トピックが確立していないので、「話題継続の原則」はこの文を誤って不適格としてしまう。一方、関連性制約(13)は以下に示すようにこれを正しく説明することができる。

- (21) a. If he is a customer, then he may ask a question.
 b. If he is looking for a toy, then he may ask something about toys.
 c. He may ask something about a toy.
 d. If he is looking for a present, then it may be for a child.
 e. He is looking for a present for a child.

おもちゃ売場の店員はこの男を見かけ、(21a-b)のような想定を抱くと思われる。さらにこの男が *What I'm looking for* と言うのを聞いて、(21c)の結論に達すると思われる。この結論は(21a-b)の想定のうち一方から導くことはできず、両方の想定から導かれたものであるから、このwh節はこのコンテキストで「文脈含意」という文脈効果を持つ。また、処理労力に関していえば、(21c)の結論は(21a-b)の想定から容易に導くことができる。したがって、(20)のwh節は関連性制約(13 i)を満たしているということになる。店員はさらに(21d)の想定を抱き、この想定と(20)の焦点節の新情報 *a present suitable for a 6-year-old* から容易に(21e)の結論に達する。この結論は(21d)の文脈における焦点節の「文脈含意」ということになる。したがって、(20)の焦点節は関連性制約(13 ii)を満足する。この結果、wh分裂文(20)は関連性制約(13 i, 13 ii)をともに満たし、正しく適格文とされるのである。

6. 結 び

本稿では、談話における wh 分裂文について、Declerck (1984) の機能的な原則の理論的妥当性を検討し、この原則には重大な問題点があることを指摘した上で、関連性理論の立場から代案を提示した。第1節、第2節では、Declerck (1984, 1988) で提案された「話題継続の原則」には、論理的不備、理論的矛盾、さらに経験的不備があることを例を挙げて論じた。第3節では、wh 分裂文は wh 節と焦点節の2つの構造から成り立っているということを Grimes (1975), Kuno (1977) らに従って指摘した。第4節では、wh 分裂文の wh 節が談話において果たしている機能、すなわち、wh 節は、一般に、言語的・非言語的の先行文脈に現れている情報と、直接的、あるいは間接的に一定のつながりを持つということを、形式的、意味論的、及び語用論的つながりの観点から検証した。第5節では、wh 分裂文の wh 節の内容が言語的・非言語的の先行文脈から直接・間接的に導かれる情報と密接に関係しているということを、関連性理論の立場から一般化し、wh 分裂文の関連性制約(13)を提案した。さらに、この制約は、Declerck (1984) の「話題継続の原則」では説明することのできない例をも的確にとらえることができることを示し、wh 分裂文の適格性の微妙な相違にも対応することができる妥当性の高い制約であることを例証した。⁵

注

- Declerck (1988) は、その第5章として Declerck (1984) の内容はそのままに、文番号、その他若干の修正を加えたものを載録している。本稿では、内容、記載ページに言及する際、*Lingua*, vol. 64に掲載された Declerck (1984) を参照する。
- Declerck (1984) は theme と topic を区別することなく用いているが、本稿では安井(1978)に従い、theme (主題) は文について用いる用語であり、topic (話題) は談話について用いる用語として区別して用いることにする。
- Kuno (1977: 98) は、次のような例を挙げ、wh 分裂文の場合、be 動詞の前に必ず休止があると指摘している。

(i) a. John is coming here tomorrow.

b. John's coming here tomorrow.

(ii) a. His hobby is going to parks.

b. *His hobby's going to parks.

(iii) a. (?) What he's doing's getting him trouble.

b. *What he's doing's getting himself into trouble.

(i b) における be 動詞の縮約形は進行形であるから許されるが、(ii b) における be 動詞の縮約形は等式型 (identificational use) のものであるから許されない。(iii a) の be 動詞は、(i) の場合と同じく進行形であるので縮約形を用いることはできるが、疑似分裂文 (iii b) の be 動詞は、(ii) の場合と同じく等式型のものであるため、縮約形は不可能となる。

4. wh 分裂文の関連性制約(13)は, Kato (in press)における Relevance Hypothesis for Wh-clefts の不備を補い, 若干の修正を加えたものである。
5. 談話における wh 分裂文の主な機能としては, 本稿で論じた先行文脈との関連性以外に「強調」や「サスペンス」等を挙げることができるが, 本稿では, 紙幅の都合でこれらの機能についての議論は割愛せざるを得なかった。これについては Kato (in preparation) で論じている。

References

- Chafe, W. (1974) "Language and Consciousness" *Language* 50, 111-133.
- Carlson, L. (1983) *Dialogue Games: An Approach to Discourse Analysis*. Dordrecht: D. Reidel Publishing Co.
- Collins, P. C. *Clefts and Pseudo-Clefts Constructions in English*. London: Routledge.
- Declerck, R. (1984) "The Pragmatics of It-clefts and Wh-clefts." *Lingua* 64, 251-289.
- . (1988) *Studies on Copular Sentences, Clefts and Pseudo-Clefts*. Leuven: Leuven University Press.
- . (1994) "Review Article: The Taxonomy and Interpretation of Clefts and Pseudo-clefts." *Lingua* 93, 183-220.
- Erku, F. and J. Gundel (1987) "The Pragmatics of Indirect Anaphors," J. Verschueren and M. Bertuccelli-Papi (eds.), *The Pragmatic Perspective: Selected Papers from the 1985 International Pragmatics Conference*, 533-545. Amsterdam: John Benjamin.
- Halliday, M. A. K. (1985) *An Introduction to Functional Grammar*. London: Arnold.
- Higgins, F. R. (1979) *The Pseudo-Cleft Construction in English*. New York: Garland Publishing.
- Inoue, K. (1982) "An Interface of Syntax, Semantics, And Discourse Structures," *Lingua* 57, 259-300.
- Kato, M. (1994) "Review Article: *Preposition Stranding: From Syntactic to Functional Analyses*." *English Linguistics* 11, 291-317. The English Linguistic Society of Japan.
- . (1995) "Anaphora and Relevance Theory," *ENGLISH USAGE AND STYLE* 12, 11-21. The Japan Society of English Usage and Style.
- . (1996a) "Referring Expression in Discourse: Relevance-Theoretic Approaches to Pronominal Anaphora and Bridging Reference." *International Journal of Pragmatics* VI, 1-17. Pragmatics Association of Japan.
- . (1996b) "Bridging Reference: A Relevance-Theoretic Approach," *ENGLISH USAGE AND STYLE* 13, 30-40. The Japan Society of English Usage and Style.
- . (1996c) "Kanrensei-Riron no Shiten (Theoretical Implications of Relevance Theory)," *Bulletin of Joetsu University of Education* 15, No. 2, 481-493.
- . (in press) "Wh-clefts in Discourse: A Relevance-Theoretic Approach", *International Journal of Pragmatics* VII. Pragmatics Association of Japan.
- . (in preparation) "On Functional Properties of Wh-clefts: Emphasis and Suspense."

ms. Joetsu University of Education.

- Kempson, R. (1988) "Logical Form: The Grammar Cognition Interface," *Journal of Linguistics* 24, 393-431.
- Kuno, S. (1977) "Wh-cleft and It-cleft sentences", *Studies in English Linguistics* 5, 88-117.
- Matsui, T. (1993) "Bridging Reference and the Notions of 'Topic' and 'Focus'," *Lingua* 90, 49-68.
- McCarthy, M. (1991) *Discourse Analysis for Language Teachers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Prince, E. (1978) "A Comparison of Wh-clefts and It-clefts in Discourse." *Language*, 54, 883-906.
- Sperber, D. and D. Wilson (1986) *Relevance: Communication and Cognition*. Cambridge: Harvard University Press.
- . (1995) *Relevance: Communication and Cognition*. (second edition) Cambridge: Harvard University Press.
- Wilson, D. and D. Sperber (1993) "Linguistic Form and Relevance," *Lingua* 90, 1-25.

Functional Properties of Wh-clefts in Discourse

Masahiro KATO*

ABSTRACT

This article is concerned with the functional properties and the principles of Wh-clefts that govern the use of Wh-clefts in discourse. The main points argued are (i) that "the principle of theme continuity" proposed in Declerck (1984, 1988) not only runs into theoretical inadequacies but also empirical ones, and (ii) that what is expressed in the Wh-clause of Wh-clefts should be relevant to the information directly or indirectly available in the prior linguistic or non-linguistic context, and (iii) that what is expressed in the focus clause should be relevant to the information necessary for the specification of the Wh-clause. These two requirements for the appropriate use of Wh-clefts in discourse are formalized in the framework of Relevance Theory developed by Sperber and Wilson (1986, 1995).

* Division of Languages: Department of Foreign Languages